

此現象ハ從來平凡ナル周知ノ事實トシテ専門ノ方々ニハ既ニ認メラレテ居ラレタカモ知レナイイガ門外漢ナル小生ニハ初メテバアリ特別ニ興味ガ惹カレ且教ヘラル、コトガ尠クナカッタ、由テ取敢ヘズ本稿ニハタゞ其事實ノ報告ノミヲ録スルコト、シタ、小生ノ檢シタ子葉ハ長サ三・二糎、幼根三・五糎、子葉ノ最廣幅部ハ二耗弱デ色ハ淡蒼綠白色デ下部ニ至ルニ從ツテ色ガ淡クナツテキタ自生地デハソレガ直立シテキルヨリモ斜ニヘノ字形ニ彎曲シ其先端稍ヤ上向スル傾向ノモノガ多カッタ

外國デハけし科ニ屬スルモノ、中ニ單子葉ノモノ、アルコトヲ記シタモノハ散見スルガマダ我邦カラノ文獻ニハ之ヲ報ジタモノ、ナイ様ニ思ハル、マ、記シテ委曲御教示ヲ願フ次第デアル

(追記) 本稿ヲ草シテヨリ二ヶ月餘ノ後、信濃博物學雜誌第三十九號(大正二年五月五日發行)ニ河野齡藏氏ガ既ニ本種ガ單子葉デアルコトヲ見ラレタトノ記事ノアルノヲ見テ私ハ茲ニ一ノ有力ナル裏書ヲ得タコトヲ喜バシク思フ

【牧野曰フ、松平康民、加藤泰秋、青木信光、久留島通簡ノ諸子爵連中ノ山草會時代ノ或ル年、ソレハ今カラ約ソ十五六年程モ前デハナカッタカト思フ同ジ仲間ノ木下友三郎氏デアッタカ城敷馬氏デアッタカこまくさノ種子ヲ鉢ニ播イテ澤山之レヲ生ヤシテ會ヘ持チ出シ當時其一枚シカナイ子葉ヲ見テ珍ラシイコトダト言ヒ噺シテ居ッタ事ガアッタ此レガ抑モ我邦デ此子葉ニ氣ノ付イタ始メデハナイカト思フ、西洋ノ書ニハ疾ニ近縁ノえんこさく屬即チ *Corydalis* ノ胚ニハ唯一枚ノ子葉ヲ有ツテ居ルト書イテアルガ我がきけまんヲ始メトシみやまきけまん、やぶげまん、むらさきけまん、じろばうえんこさくナド皆然ルヤ否ヤ實地ニ其種子ヲ播イテ之ヲ實驗セバ必ズ面白イ結果ガ得ラレヤト思フ】

○斷 枝 片 葉 (其二十四)

牧 野 富 太 郎

●ねざさヲ見ヌ珍ラシイ土地

南伊勢度會郡穗原村ハ珍ラシクモ村内ニ一本ノねざさモ生ジテ居ラヌソレ故新ニ土地ヲ開懇スル時ナド此煩ハシイさゝガ無クテ誠ニ都合ガヨイ、同村押淵ニハさくしのぶノ多イ鬼ヶ城山

ガアル

●かしはノ葉

かしは餅ヲ包ムかしはノ葉ヲ相州秦野^{ハタノ}ヨリ出スガ是レハ其近傍ノ地カラ一タビ
 秦野へ集中シ秦野カラ各方へ輸リ出スノデ秦野ニ産スルノデハナイ、此葉ハ初夏ノ頃ニ樹カラ採摘シ日蔭干ニ
 シタモノデア、世間デハ能ク櫛^{カシ}ノ字ヲかしはト書イテ居ルガソレハ間違ヒデ之レハ櫛^{カシ}ノ字デナケレバナラヌ
 又此かしはニ柏ノ字ヲ用フルノハ借字デ柏ハ松柏類ノこのてがしはノ名デアツテ餅ヲ包ム此かしは即チもちが
 しはノ名デハナイ、大昔マダ開ケナイ時分ニハ木ノ葉ヲ其マ、利用シテ食物ヲ盛ツタモノダ關ノ葉ナレバ何ン
 デモ利用シタデアラウカラ彼ノほうのき、あかめがしは、いひぎり、さるとりいばらナドノ葉ハ早速ニ使用シ
 タモノデアアラウ此時分ニハ此ノ様ニ食物ヲ盛ルニ用キタ葉ヲ皆一樣ニかしはト呼ンダト想像セラル、後世ニナ
 ツテ段々ト種々ナ食器ガ出テ來タノデソノヤウナ天然ノ葉ヲ用ウル必要モ自然ニナクナリ從テ其名モ次第々々
 ニ極限セラレ兎モ角モ今日尙ホ食物ノ一種ヲ載セ包ムニ用キツ、アル今ノかしはガ獨リ昔ノ名ヲソノマ、專有
 シテ居ルコト、ナツタデアラウト思フ、昔ノ名殘リヲ留メテ今日デモ處ニヨレバ尙あかめがしはノ葉ニすしナ
 ドヲ載セ又食物ヲ置イテ神前ニ供スルコトガアル昔ハ普通ニハ大抵此あかめがしはノ葉ヲ利用シタラシイコト
 ハ今日デモ尙上ノヤウニ其利用ノ餘波ガ殘ツテ居リ又此木ガ最モ普通ニ且最モ廣ク人家近カデモ多クアルカラ
 デモアル、又ほうのきモ處ニヨレバ食物ヲ包ム爲メニ今日大ニ入用ナノデ家ニ一株アレバ其家ノ財産ノ一ツノ
 ヤウニナツテ居ル國ガアル即チ飛驒ノ如キガソレデア、又さるとりいばらモ今日五月ノ節句ニ餅ヲ載セ或ハ
 包ムニ使用セラレテ居ル處ガ多イ、又いひぎりモ其名飯桐ノ示スヤウニ昔ハソレニ飯ナドラ載セタモノデアラ
 ウガ今日デハタゞ其名ガ殘ツテ居ルバカリダ

●からすしきみノ幹ノ太サ

からすしきみ一名やましき

み即チ *Daphne Miyabeana* MAKINO. ハ常緑ノ小灌木デア、ルガ本年七月越後赤倉ノ山地デ逢着シタ者ハ幹ノ長サ
 三尺許モアリ枝ヲ分チ赤實ヲ着ケテ居タ幹ノ横徑ハ五分許デ其年輪ヲ檢シタラ六七年ヲ經タ者デアツタ

●えのきぐさノ漢名ハ人苺デア

植物名實圖考卷ノ三ニ人苺ト云フモノガアル今其圖說ヲ按ズルニ正ニた

かとうだい科ノえのきぐゝ一名あみがねやう即チ *Acalypha australis* L. デアル圖考ノ文ハ『人苧ハ蓋シ苧ノ通稱デアレドモ北地デハ色青黒クテ莖ノ硬イ者ヲ之レニ當テ、キルニ鐵莧ト名クル葉ハ極メテ粗澀デ食ニ中ラナイガ刀創ノ要藥トスル其花ニ兩片ガアツテ一二圓蕾ヲ受ケ漸ク小莖ヲ出シテ子ヲ結ビ甚ダ細ヤカデアアル江西デハ俗ニ海蚌含珠ト呼ビ又撮斗撮金珠ト曰フガ皆其形ニ肖ドルノデアアル云々』^{漢文}デアアル松村博士ノ^訂改植物名彙前編ニハヘンリー氏ヂャイルス氏ニ從テタバ鐵莧榮ノ一ツガ載セテアルバカリデアアル

長門ニモ産ス

●たれゆゑさう

ナドト同屬デアアル、名マデ可憐ナ此たれゆゑさうハ我邦デハ伊豫ニモ豊後ニモ産スルガ更ニ其レノ第三產地トシテ周防國佐波郡西浦村字小茅山^{コガヤ}ガ算ヘラル、ニ至ツタ其場處ハ今日デハ内務省ノ史蹟名勝天然記念物ノ指定地トナツテ居ルト思フガ其始メ今カラ數年前ニ同國佐波郡西浦村六五六番地田中周花君カラ私ニ送ツテ來タ書面ガアツテソレニ次ノ記事ガ書イテアツタ私ハ周防ニ此あやめノ産スルコトハ新事實デ眞ニ珍ラシイ事デアアルカラ大ニ保護ヲ講ゼネバナラスト云フ事ヲ返書シテ置イタコトガアツタソレカラ騷ギ出シテ遂ニ内務省ノ指定地ニナツタノデアアル、周花君ノ書面ノ記事トハ『小茅山は私の居村の南端に突き出て居る一つの小山で山下には西浦港があります山から鹽田も見えます三田鹽と云ふ中にも西浦の濱から取る鹽が入つて居るのですその姫あやめのある所は山の一部で昔し湯が出たと云ひ今その所を「湯の塔」と申して居ますそれから少し上りました所でありす昔から小茅の名物は銀蓮金蓮と姫あやめと縞がやの三つあつたと申して居ります今日では姫あやめが少しある斗りで外のものは見當りません銀蓮金蓮共に一錢銅貨位の葉花で金色と白色とが咲いてゐたと云ふのです母校の先生ハ姫あやめのある所は皆溫泉地であるから溫泉地帯によく適した植物であるのではないかと申します小茅は三田尻驛から約三里位です西ノ浦は佐波郡の一番南端にありかの三十六里ある周防灘に添ふてゐるのです佐波川を境に向ふが吉敷郡です私の内はその川の邊で近頃水がよく出てよく堤がされますので困ります去る七年にもされましたよく晴れた日には豊後の高山豊後富士がよく見えます』デアッタ此文中ニアル金蓮銀蓮ハ多分金蓮ガ黃花ヲ開クあさぎ、銀蓮ガ白花ヲ開クがとぶたデハ

ナカッタラウカト想像スル

●つばきノ椿ハ和字デアル

世間普通ニつばきヲ椿ト書クノハ元來和字ヲ

用ウルノデ寺島良安ノ倭漢三才圖會ニ椿ヲ倭字ダト斷ジテアルノハ確ニ卓見デアル大抵ノ人ハ椿ノ字ガ支那ニモアル(即ちちやんちん)ノデ敢テ其椿ノ本義ヲ以テ我つばきヲ律セント試ミ種々ナ臆説ヲ出シテ居ルガ私ハ其レハ牽強附會ノ説ヲ爲スモノダト愚考スル、椿ヲつばきトスルノハ丁度えのきヲ榎(支那ノ榎ハ別物)、ひゝらぎヲ柎(支那ノ柎ハ別物)、しきみヲ櫛、さかさヲ櫛、はざヲ萩(支那ノ萩ハ別物)ト書クノト同ジデアル然ニ學者ハ眞向ニナツテ『本邦ニテ古ヨリ椿ノ字ヲツバキト訓ズルハタマツバキノ古訓ヲ誤リタルナリ其タマツバキト云ハ今俗ニキャンチント呼ブ者ニシテツバキノ類ニ非ズ』ト言ツテ居ルガ氣ノ利カナイ説デアル此ク椿ソレ自身ノ古名ヲたまつばきデアルト斷ズルハ輕卒デ是レハ却テ八千歳ヲ春ト爲ス大椿ナドノ語ニヨツテ春咲クたまつばき(つばきノ美稱)ヲ逆ニ椿ト想像シタモノデアラウ又學者ハ椿ハ『本邦ニ舊ヨリ多キ者ナレドモ昔人識ラズシテ唐人ヨリ種ヲ取ヨセ黃蘗山ニ栽エシト云』(黃蘗山ハ山城ノ字治ノ萬福寺)ト記シテ居ルガちやんちんハ絶對ニ我邦ニハナク後支那カラ來タモノデ恐ラク右ノ黃蘗山ニ栽エシガ殆ト始メテデアラウト思フ決シテ昔カラ我邦ニ多イ樹デハナク從テたまつばきノ名ナドアラウ筈ガナイ、椿ガつばきノ時ハ其音(アルトスレバ)ハちんデナクしゆんデアラネバナラヌ譯ダ、序ニ曰ク世人ハ能クさざんくわヲ山茶花ト書イシ居ルガ是レハさざんくわノ呼ビ聲ガ山茶花ノ音ニ似テ居ルカラデさざんくわニコンナ漢名ガアル譯デハナイさざんくわノ漢名ハ茶梅デ山茶ト書クトつばきノ漢名トナル故ニさざんくわヲ山茶花ト書クトつばきト間違フカラコレハサウ書カナイヤウニ避ケタ方ガヨイト思フ

正誤 ●第三卷第三號口繪おらんだがらしの學名 Boripa ヲ Boripa O(52) 頁、五行中途而シテ私ノ實驗云々ヨリ同八行讀切り迄ヲ同頁十四行中程 全ク抹殺セラル、ニ至ッタノ次ニ挿ム O(66) 頁、三行 寄附ハ 寄附 ●同第六號(129) 頁、左ヨリ三行並ニ(130) 頁、左ヨリ五行マクミランハマクミラン ●同第七號(135) 頁、左ヨリ七行 業生シタハ 業シタ O(153) 頁、左ヨリ五行 ユエハ ユエ O(170) 頁、十行 清季ハ 清孝 ●同第八號(199) 頁、左ヨリ四行 列フヌハ 列ラヌ ●同第九號(206) 頁、左ヨリ七行 リウきういもハ あめりかいも ●同第十號(236) 頁、左ヨリ五行 MAMAMOTO ヲ YAMAMOTO O(244) 頁、九行 任ハ 仕 O(246) 頁、五行 二十一日ハ 二十日 O(247) 頁、五行 一女ハ 四女 ●(注意)歐文ノ正誤ハ歐文ノ末ニ附載シテアル